



3月になり、日の光も強く、日に日に暖かさも増してきました。山々の木々も薄っすらと煙のように萌え始めました。何がしか気分も明るくなってきます。冬から春への季節の変化は心に潤いを与えてくれます。

・ ・ 景気がどうの、こうのって ・ ・

「-景気は、持ち直してきているが、自律性に乏しく、失業率が高水準にあるなど依然として厳しい状況にある-」

これは先月2月22日に内閣府が発表した月例経済報告の冒頭の言葉です。

「-景気は、急速な悪化が続いており、厳しい状況にある-」

これは昨年2月19日に内閣府が発表した同報告の冒頭の言葉です。フレーズは短いですが、読むと昨年の痛みが甦ってきます。まさに需要が消滅していく瞬間です。そしてその一年後、最初に挙げた月例経済報告は、まだ厳しいトーンは残しながらも、景気の持ち直しを伝えています。またニュースでは今月15日に閣議決定する3月の月例経済報告で、景気判断を8ヶ月ぶりに上方修正する予定だとも伝えています。中国等の海外成長センターの想像以上の成長のおかげで、力は欠けるものの日本もプラス成長に転じつつあります。昨年12月ごろ、2番底到来と危機を煽っていた論評はさすがになくなりました。

話は変わりますが、日経新聞の月曜日版に週一回、「景気指標」という紙面があります。見ている方も多いと思います。私も深く数字を読み込む力はないのですが、眺めるようにはしています。国内総生産始め各経済指標が時系列に一覧で見られるので便利です。国内だけではなく、米国、アジア等の主要国の指標も掲載してあるので、国別のトレンドも比較でき、経済の動向を自分なりにイ

メージングすることに役立っています。例えば、以下、独り言のように・・・、「・・・国内生産指数は昨年3月以来前月比増加を続けているな。消費が冷え込んでしまっているなんて言っているけど、世帯消費支出が昨年8月より前年比プラスに転じているじゃん。厳しい厳しいと言っているながら、企業も10月-12月の第3四半期は営業利益を前年比大幅に改善させているし・・・今年になって建設工事受注前年比もプラスになったな。どれも確かに去年の落ち込みがひどく、その反動的要素もあるけど・・・、そこに焦点を当て過ぎるのもトレンドを見落とすかもしれないな。あれー、リーマンショックでボロボロと思っていた米国が昨年7月9日には国内総生産がもうプラスに転じているじゃん。想像以上に回復力が強いじゃないか。貿易収支の赤字が昨年5月に底を打ってからずーと拡大しているし・・・。なんだかんだと言っても結構、輸入も増加しているということじゃない？新興国経済にばかり目がいつているけど、米国を日本と同じように見てしまうのはまずいな。人口が縮小している日本と違って、今でも人口が増加しているし・・・」等々。

確かに、深い知識や洞察なく、データのうわべだけ見て、かってに解釈してしまうのも危険です。ただ、評論家という人たちが、その時々雑誌や新聞で、景気についてのコメントを書き立て（実態としては仮説的なものが多いのでは？）ただそれを鵜呑みにしてしまうことの方が、現代では危険なような気がします。鵜呑みにされた情報は次々と無防備な私たちに伝播し、それが世論を形成し、世の中をそんな気にさせてしまいます。景気の話だけではないですが、今は情報が自分の意図とは関係なくあらゆる方向から入ってきます。考える間もなく安易に権威をもっているような情報に乗ってしまいます。受け売りではなく、生のデータや変化に立ち返ったうえで、敢えて危険を承知の上で、自分の頭で考えてみる習慣をつけること。実は、現代ほどそれが必要な気がします。

竹中平蔵さんが1月7日の日経新聞の「経済教室」の中で、常に経済社会をバランスある状態を保つ仕組みの一つとして国民の「経済リテラシー」を高めることだといっています。庶民感覚からするとハードルが高い要求ですが、せめてまず、自分の頭で考え判断してみる、というプロセスを設けることは、誰にでも出来るのではないのでしょうか。・・・あれ～！もしかして、これって、受け売り？（自戒）・・・。